

【特別寄稿】

我が教育・研究生生活とその時代

—— 思い出すままに ——

大阪外国語大学 名誉教授 加賀谷 寛

一、私の学生時代のこと——一九四八―五六

私がウルドゥー語の学習を始めた頃は、日本が終戦直後の、まだ混乱を残した時代であり、そこから脱却し始めていた時代であった。旧制の東京外事専門学校インド語に入学し、初めてウルドゥー語に接し、入門した。その文字は中東から南アジア世界に亘って歴史的に用いられ、それら地域の文化、社会を知るために必要な手段であることを初めて知った。この文字に習熟できたのは、これ以後の私の研究生生活に役立つことになった。言うまでもなく、この文字が、英語などのアルファベットの元になる古代オリエントのフェニキア文字などに発するも

のであり、イスラム時代には、コーランの書写に用いられ、アラビア語、ペルシア語、それにウルドゥー語の文字になってきた。ヨーロッパ世界のアルファベットも、文字に関しては、このセム系の文字を借用してきたことはいうまでもない。

さて、当時のウルドゥー語の指導教授は、蒲生礼一先生（一九七七没）であり、戦中からウルドゥー語と近代イラン研究の分野の研究・教育に従事され、戦中には大久保幸次所長の回教圏研究所でその研究を担当されておられた。私は先生のもとでウルドゥー語を学び、またペルシア語とイラン文化を学ぶ機会に恵まれることになった。なぜならば、ウルドゥー語は、近代ペルシア語の影響の下に発展したものである。付言するまでもなく、先生は戦中から戦後に亘って、イスラムの概説を書かれておられた。さらに、先生の御好意に甘えて、休日はお宅によくお邪魔して、親しく御示唆を受けることができた。またこの頃、アラビア文化を介した東西交渉史の研究者である前嶋信次先生のお宅にも直接お伺いして親しく豊富な学殖に接することができた。

この間に、旧制の東京外事専門学校は新制東京外国語大学に変わり、私は病気で一年遅れたが、翌年、その後

期に編入を許された。ここで関心のあったイスラム世界をさらに学ぶために、東京大学人文科学研究科宗教学・宗教史学の修士課程に進学した。ここに、すでに学んだ現代アジアの言語の上に、人文科学の一分野の研究とが結びつくことになった。当時は宗教学内部では、イスラムを専門とする先生はおられず、宗教社会学を講じておられた小口偉一先生がイスラム研究に関心を示され、日本におけるその開拓の必要を感じておられた。先生には、後に東京大学東洋文学研究所助手時代にさらに御指導を給わることになった。

この時代には、若者の間では、進歩主義運動が大勢を占めており、アジア・アフリカ世界では、民族解放を目指すナショナリズムの抬頭が著しかった。私も、このような雰囲気の中かで、東大東洋史の石田保昭さんを中心に、自発的に、複数の学部、学科の学生が集まって、同人雑誌『インド・イラン評論』を発行した。それは懐かしいザラ紙のガリ版印刷のもだったが、古い東洋史学や欧米中心の東洋学に反対し、現代のアジア・アフリカ・ナショナリズムを中心に据えて積極的に評価しようとするものであった。

それとともに、他方で、私は欧米の、自己批判的で

ベラルな第二次世界大戦後に現われた著書からも強い衝撃を受けた。その代表が H.A.R.Gibb や W.C.Smith などであった。彼らは文献批評中心の欧米の旧来の東洋学を批判して登場し、新らし動向を示していた。

二、私の研究生生活の開始——一九五六〜六二

修士コース終了とともに、幸い私は、東大東洋文化研究所に助手として採用された。同研究所は、この頃、学界でも現代アジア研究への関心が高まってきたなかで、それまで未開拓の現代アジア地域の研究の必要が認められるようになってきた。イスラム研究の必要もその一つに挙げられたのであろう。このような気運の中かで、未熟な私が選ばれたのであろう。

同じ年の一九五六年末、イラン政府からテヘラン大学文学部への留学の機会を与えられ、未経験の国イランに向かって出発し、一九五八年帰国した。この間、近代ペルシア語を学ぶとともに、イラン近現代史に関心を集中し、それに関するペルシア語の文献資料をできるだけ蒐集することに努めた。日本の戦前と戦後の中東研究の違いは、現地語資料を利用するか、どうかにあるが、イ

ラン留学のお蔭で、私は近代ペルシア語資料を利用する機会を持った。

三、大阪外国語大学の時代とそれ以後

——一九六一〜一九九

大阪外国語大学ウルドゥー語学科の沢英三先生が停年を迎えられて、その後任に私が招かれた。先生は既出の蒲生先生の数年先輩の東京外語ウルドゥー出身であり、その業績には、ペルシア古典文学のサアディー作『グリースターン』の訳（岩波文庫）があつた。このようにして、停年まで私は同大学にウルドゥー語学の担当として外国語教育に従事した。また同時に、近代イラン研究とイスラム研究を進めた。この後、私は本学に迎えられ、勉学に熱心な学生の教育に当る機会に恵まれた。

この間、イスラム共同研究プロジェクトが、東京外国語大学アジア・アフリカ研究所、などで推進され、私も共同研究員として、その多くに参加した。共同研究組織は、言うまでもなく、隣接分野の研究者との交流ができる機会をもたらし、地域研究はこれなしには成立できない。そこでは、多様な研究分野の研究者が自分の専門や

世代の違いを超えて、互いに議論して学べる好機会であつた。

加うるに、最近の傾向として、国際的な研究組織との交流が増大し、先方に出かけては参加する機会が増大しただけでなく、我が国の研究組織に、イスラム世界側と欧米側から研究者を招いて交流する傾向が増大しており、日本におけるイスラム研究の未来にとって好ましいことであろう。

最近のもう一つの注目すべき点は、日本のイスラム研究が従来主流であつた歴史的研究に並んで、それとは問題意識やアプローチを異にする文化人類学などにも関心が向けられ、その成果が表れるようになったことがあげられるであろう。これは、総合的イスラム研究に幅を広がりを与えることになるう。

以上、日本におけるイスラム研究の時代が戦前、戦中、戦後、さらに現代の研究へと発展してきたことを八十路を越えた私なりの眼で見た。それにしても、イスラム研究は我が国においては、新興の形成途上の学問領域にあらう。それに応ずる意義込みを持って、現役の方が研究に当たっていただきたいと、強く期待する者である。